

【翻 訳】

ゴルウエイ・キネル訳詩集

矢口以文

詩 集 *Body Rags* より

どれだけの夜 (How Many Nights)

どれだけの夜
恐怖のうちに横たわったことか
おお 創造主なる霊よ 夜と昼との創り主よ

(三三)

しかし次の朝には
凍った世界に出て行って

きしる雪の下に

静かな息をかすかに聞くだけだった――

蛇

熊 みみず あり――

頭上の

今まで誰も泣き叫んだことのない枝から

からすが荒々しく「かあかあかあ」鳴いていた

ヤマアラシ (The Porcupine)

1

草で太り

野性のりんごでふくれあがり

勅皮しんひと師部しほでふくらみ ヤナギの花

ポプラの尾状花 アスペンとカラマツの

若葉でまるくなつた

ヤマアラシが

最後の食物を 氷 泥 バラ アキノキリン草の中を

引きずつて 刈り株の残る高い畠にほうりあげる

2

性格的には

私たちと七つの点で似ている

屋外便所にしるしをつける

月光で変質する

走りながら小用をたす

登る時には尻尾を使う

脅かされた時にはひとり静かにくすくす笑う

五エーカーにひとり以上いると混雑する

目の内側が独特に赤い

3

床を何度も往復し 玄関の所で

ちゆうちよし その側柱か

窓の堅柱に

恐怖の掌紋をつける彼は
掘るのが得意で この世界を

削って私たちを

除去しようとする 切りきざみ

穴だらけにしようとする——もしこの世界から

私たちの汗と悲哀のすべてを取り去れるなら

この世がなくなるまでやり続けるだろう

木目の流れる斧の柄

モリスチェアのひじ掛け

指先の液体に漬けられた

手芸品

げんこつの脂とひじの脂で

湿った表面

体の形をした布切れの 脇の下や股を

つかんだ洗たくばさみ——これらのものの

崇拜者

星々の回転には

関心を示さずうんざりしているが こういうものには

驚嘆する超

リルケ風の天使！

この大地で彼の

最も好むのは 人間の顔の

取り憑かれた峡谷をはねおちる

底が重くてきらきら光り

目をひくひくさせる

しづくの形の

塩水だ

4

大枝の上でうたたねしていたヤマアラシを

農夫が三度射った 落ちる途中

折れていた枝で

腹を引き裂き

腸を引っかけた しかし

落ち続け 地面で

すくっと立ちあがり

腸を支払ってあえぎ

もがいて走ったのだ 険しい

無の

前の

アキノキリン草を百フィートほど

5

「アベスタ」*は

ヤマアラシを殺した者たちを

九代に渡って地獄におとし

欲望の塩のために

互の心臓を

えぐり出すようにと判決する

私は大きなベッドに乗り

この国の崩壊した農場や森の模様の

キルトの下で

あちらこちらと転がり回る

男の脂肪のさやが

溶ける

自分を突き刺す剛毛の渦巻が

逆さになって外側に咲く――

赤い目の 硬い歯の 矢に刺された腕白小僧が

マッドレスの羽毛を投げあげ

横の女性を
泣き声あげるまで突き刺している

6

生きている間 私は
うずくまって針を立てていた
脅えた心の

聖

セバスチャンで

裸の鼻づらを

ニセアカシヤのこん棒でこっぴどくなぐられた

高い所から落ちて

逃げた

アキノキリン草の野原を

胆をつぶして走って

我が家を求め

花の中で

無になった

首をうしろから絞めたロープが

秋の日射しの中で

私の血を浴びて突然輝いた

7

冬の草原にある壊れた頭蓋骨か

中を吸われた卵のようにうつろになつて

私は今夜うるつこう 静かにくすくす笑い

自分を書きこみのない型板にして

死んだ花咲く野原に飢えた腹を引きずろう

そこでは

ごぼうは種子の箱舟を失い

アザミは失った花を持ちあげ

風の中でバラのかん木が死んだ枝をこする

バラの

強いられた炎を生みだすために

* 「アベスタ」はゾロアスター教の聖典

熊 (The Bear)

1
晩冬

古くなった雪の割れ目から
湯気が少し
立ちのぼっていることがある
かがんで近づくと肺の色をしている
鼻を近づけると
熊のひんやりした
しつこい匂いだ

2

狼の肋骨を取り 両側を
鋭く削ってから
糸を巻いて輪の形にし
鯨の脂肪の中で凍らせ
熊たちの通る道に置く

それが消えた時
熊の通った跡に出て行って
最初のためらいがちな暗い
しみを 土の上に見つけるまで
ぐるぐる歩き回る

あちらこちらにさまよう
血のしみを追いかけて
走り始める

熊が爪で傷つけ深く切りこんで休んだ所で
私も止まって休み

もろそうな氷の上を通るために
腹這いになった

形跡のある所では

私も腹這いになり

熊をしとめるナイフを握って進む

3

三日目に飢え始める

そうなることは分っていたのだが
夜には
血にまみれた糞に身をかがめ

ちゆうちよしながらつまみあげ
口にほうりこみ強く噛んで飲みこみ
立ちあがって
走り続ける

4

口にするものは熊の血だけになった
七日目の今
はるかむこうに ひっくり返った死体が見えた やせこけてはいるが
湯気を立てている巨大な奴だ
重たい毛が風の中でさざ波を立てている

近づいて

狭い間隔の小さな目を見つめる

狼狽した顔が

肩にもたれている 鼻穴は

ゆらゆらしている 多分

死んだ時に

私の最初の気配をかぎつけたのだ

熊のものに

峡谷を切りこみ 食べて飲み
体全体を縦に裂き
開いて中に入って
閉じ 風を遮断して
眠る

5
内側から二度突き刺され
凍土帯を

足を引かずって歩く夢をみる――
どこをよるめこうと 熊を
超越するどんな放物線を描こうと どんな
孤独な踊りを踊ろうと 引力に
とらわれたどんな跳躍を どんな
歩みを どんな唸り声を試みよう
自分の背後に 回りに 血の跡をはねちらす夢をみる

6
遂にある日 よるめき倒れる――
必死に生き続けようと
しみこんできた血を消化し

あの骨を噛みくだいて
消化しようとした胃の上に

うつぶせに倒れる——今 微風が

私の上を吹く 消化しなかった熊の血の

むかつくようなおくびと

くさった胃と

熊特有の不快な匂いを吹きとばし

うずいて

だりだりたれた舌に歌か金切声を

運んでくる 立ちあがって踊らなければいけない

と感ずるようになるまで しかし今はじっと横たわっている

7

目を覚ましたと思う——沼地に光りが

再び現われ がんの群が

もう一度長い列になって空を飛んでいる

古い雪に覆われた峡谷に母熊が

横たわり 汚れた毛の塊りたちを それらの

霧雨にけぶる目を

舌でなめて

熊の形に作りあげている　そして毛深い足裏の
重たい歩みがひとつ私の前にふみ出した
次の歩みが唸り声をあげ

次のが

次のが……

私は余生をさまよって

暮らすのだ——私を生かしていたあの
粘りつく混和物　あの血のいやな匂い

あの詩は一体何だったのかと怪しみながら

詩 集 *The Book of Nightmares* より

モードの月の下で (Under the Maud Moon)

1

かつて火をたいていた

この濡れた場所——

黒い灰 黒い石 ところで浮浪者たちが

小川の水をかじり

呪われたパンを食べて聖体を拝受せず

小枝の火で体を暖めることもできずに

うずくまっていたに違いなかった——

その横の小道に私は

立ちどまり

濡れたまきを集め

けずって乾いた木片を作る——

ある女性の顔を

数時間手で

抱いていたが それをもとにもどした

それでも彼女のいた空間を抱き続けていた

その女性のために 雨の中に

小さな火をたく

黒かった

まきが赤くなり その中の死番虫の

寿命が尽きる

死んだ手足が交差して

宇宙にもう一度降りたがっているのが見える

濡れたまきの中で同じ抱擁の裂かれる音が

何度もパチパチ聞こえる

雨のしたたりが火を

消そうとして

その中に落ちて

変えられる 誓いが破られる

大地と水との間に 肉体と霊との間に交された

誓いが破られ もう一度誓われ
何度も何度も雲の中で誓われ また
何度も何度も大地で破られる

2

雨にうたれ 火のそばに
一寸座り そのぬくみにむかつて
言葉を少しかける——
石 聖者 なめらかな石——と そして
娘の見た悪夢の中で 娘にむかつて私が
しわがれ声で歌った歌のひとつを歌う

前方のどこかで
黒い熊が一頭 丘の
中腹に座って 頭を
右に左に振っている 熊は
花の匂いと雨の降った土の匂いを
嗅ぎ 最後に立ちあがり
花を少し食べて 重たげに歩いてゆく
その毛が雨の中で
光る

焦げた油脂が言葉から
流れ出る ひとつの
捕えられた調べが
残る——私の舌の下で歪む
愛の調べ それはコヨーテの泣声に似て
次第に吠え声に
変る

3

まるい

頬の幼女がベイベッドで

目を覚ます 緑の

産着が裂ける

細い糸か服が

裂ける 青い

花が咲く

生まれた娘

歌い泣く娘

成長し始める娘 髪が

生えてくる この世での

初めての春のために齒茎が芽を出してくる
かすみがまだ顔に
かかっているが
手を父の口にいれて
歌をつかむ

4

みんな終った
小さい子よ ばたばた動いたり
飛び越えたりすることが――
記憶の中に
もう一度突き出してくる
あの懐かしい孤独なでべその下や
丘の下で ひとつになつて
ひとりで水のようにとんぼ返りをする事が――
暗やみにつつまれて漂流することが――
すべり易い壁をひざやひじで
押ししたり 打って世界を彫刻することが――へその血の
流れがあなたのまわりで音をたてている

5

この子の頭が

頭を捕える場所に入ってくる

そこがこの子を吸って外に押し出す

実在自身がおしかぶさり 苦しい別れのために

この子を握る——ゆっくりした

苦痛の握り締めが暗闇の中で

この子の生命に最後の鋳型を作る

6

黒い目が

開く 黒い髪で

じとじとした瞳が

動きを止める 脳の頂上の

中心輪が世界の光の中でしばらく鼓動する

この子は顔に乗って光の中にすべって入る

この驚いた肉の

塊りは

天上のチーズでおおわれ

生命の原型の

星のようになすみれ色に輝いている 彼らが

この子の暗やみとのつながりを切ると
一瞬死んで

石炭のように青くなり

記憶が飛び出すので

手足が震える 彼らが

足を持って吊り

さげると この子は

空気を吸い 最初の歌を

歌う——それからばら色になる

ゆっくりした

鼓動 羽毛のない腕は

もう無をつかんでいる

7

丘の中腹は

寒かった そしてあなたは

ベイベッドの中で泣いた——

私たちのよりもっと不思議な悲しみが

別の世界から流れてくる
その悲しみの微笑みである曲線になるまで
削りとられた木の上で そのベッドは
一晩中揺れていた

そんな時私はあなたの所にやってきて
そばに座り

歌ったものだった あなたには分からなかったろうが

脳の静かな地帯で

覚えているだろう

霊の形をした先祖たちの

子孫の霊が 夜

あなたに歌ったことを――

天使の輝やく髪の中に

波立つと言われる

光の歌ではなく

その舌の上に咲く

黒い耳ざわりな声

モードの月がああ
初めての夜に輝き

射手座が

宇宙の冷たい初乳を吸って
星々のベビーベッドに横たわる時

私は川の土手を

這いおり 存在と滅亡の

長いさらさら音を下って

湿地帯にやってきた そこでは

土が冷たい泥の縞模様になって

にじみ出し 原初の

光の原型で

世界にふれていた

そこで私の唯一の歌を覚えた

あなたがいつか孤児になり

あなたの中から

あらゆる風の歌や光が

消え去り

舌の上にあるのは呪われたパンだけになる時

死んだすべてのものから

声が
霊が あなたに
帰ってきて
妹よ！ と呼びかけますように

その時
あなたにこの本を
開いてほしい 悪夢の本であろうとも

* 「モード」は娘の名前である。

月の光を浴びて小さな寝坊の頭が髪を生やしている
(Little Sleep's-Head Sprouting Hair in the Moonlight)

1
あなたは悪夢から覚めて金切声をあげる

夢遊病者のように私は

あなたの部屋に入って抱き上げ

月の光の中で胸に引き寄せる するとあなたは

しがみついてくる まるで

しがみつくことが私たちを救えるかのようだ

私は死ぬことはない

あなたは思っているのだろう

私はあなたにむかって

煙りか星の永遠性を滲じみ出しているのだと思う

私の折れた腕があなたの回りで癒える時でさえも

2

あなたが太陽に 落ちないで

と言うのが聞えた 花にむかって

年をとらないで 死なないで

と言うあなたをそばに立った モードよ

あなたの銀のコップの炎を吹き消したい

爪の腐敗を吸いとりたい

暗くなる光のような髪が伸びてくるのをくしけずりたい

象牙色の骨からさびをこすりとりたい

体の中の小さい肋骨から死を追いだしてやりたい
ゆりかごの灰を変質させて木材にもどしたい
あなたのどんなものでもなくならないように守ってやりたい
洗濯女たちが

手の中で衣類が眠るのを感じるようになるまで――

その時めんどりが手斧の刃の上に呪文をこすり

ねずみが悪疫の文化から歩き去り

鉄が武器を歪めて真北にむかわせ

油が進歩の機械にすべりこむのを拒否し

人の体につくノミのように人は大地で自由を感じ

恋人たちは暗がりの中で自分たちの横の存在に おお 死体候補よ……と囁くことはないだろう

しかし多分悪夢の中にいるからあなたは

泣くのだ それから目を覚まして金切声をあげるのだ

家が崩れる――その前ぶれの揺れ

の中に永遠にいるのだ

3

かつてレストランで みんなが

静かに食べていた時 あなたは膝に

のぼってきて あらゆる口にむかって

のぼってゆくあらゆる
口一杯の食べ物にむかつて 声の限りに
覚えたひとつの言葉を
叫んだ カカ！ カカ！ カカ！ と
一瞬スプーンがすべって
中空で止まり その中から湯気が
とび去っていった

そうだ

あなたがしがみつく理由は
私もあなたのように（ただあなたより
もっと前に）失われた
アルファベットの道を
道のない所を 暗闇の
むこう側にむかつて下りてゆくからだ――
あなたの腕は
靴のように取り残されるだろう
老人のためらいがちな
話し言葉の中の形容詞のようになるだろう
かつては失われた名詞を呼び出すことができたのに――

4

あなた自身

二〇〇九年のある

あり得ない火曜日

黒い石の野を

雨に打たれて歩くのだろう

石たちは自分たちの

言葉をひとつ繰返すだろう シギット シギット シギット と

雨滴は

あなたのひよめきを

何度も打ち あなたはそこに立ちつくすだろう

雨滴を自分の中に入れることもできないで

5

もしある日たまたま

ミラボー橋の端にある喫茶店で

白ワインが上むきに開いたグラスの中で立っている

亜鉛張りのカウンターの前に

誰か愛する人と座っているなら

もしあなたが私たちのように
いつかこれはみな思い出しかならないと
考えるあやまちをおかすなら

愛とあなたが思っているものを
永続的な愛に弓形でつなぐ橋の外れに
立っているのだから

やがてくる
悲しみの中に

深く達するように

なつてほしい——顔の下の

ほとんど想像するだけの骨に

ふれてほしい 笑いの下で風が

黒い石の野を吹き渡っているのを聞いてほしい

ここに

世界がある と告げる口に

キスしてほしい この口 この笑い このこめかみの骨

まだ踊っていない消滅の韻律

6

月の送り返す
光を浴びて あなたの目の中に

父の目の中でかつて

振られた手が見える 父の最後の視線のたそがれの中で
遙かかなたによるめきあがった小さな風が見える

そしてあらゆる死すべきものの天使が
糸を手放す

7

あなたはベビイベッドに帰る

最後の黒鳥が金色の翼を輝かせて「さよなら」をする

眠るあなたの目は

頭の中で閉じる すでに

夢の中で時間が歌い始める

月光を浴びて小さな寝坊の頭が髪をはやしている
帰ってきたら

一緒に出かけよう
多くのものの中を
一緒に散歩しよう

それぞれが 死の支払う報酬は愛である と
いう知識でかすり傷を負うだろうがもう遅すぎる

詩 集 *Flower Herding on Mount Monadnock MS*

夜の詩 (Poems of Night)

1

目のまわりの傾斜 降下 眼球 それに
やっとさわれる位のまっげに
手を動かしてみる
唇はすぐに退くので

骨の硬い微笑を
その下を感じるのはショックだ

少し覆われている　そう辛うじて覆われているのだ
頬骨突起　上顎骨　鼻甲介

2

お前の顔の横に
手をあてると

頭を少し手の中に
傾けてくる——だから

お前は冬眠に捕えられた

ヤマネだと分かる

孤独で　ぼんやりとした重さ

3

頬骨

額の曲がっている部分

着いまぶた

が暗い中を漂う

そして今　目を

見分けた——遠い
説明しがたい光の這う暗い目を

4

最も深い所にある記憶の何か
としか考えられないものを
ほとんどさわることもなく腕に抱く
私の記憶ではない——ただまるで私の中の生命が
それが何かをゆっくり思い出すかのようだ

お前は今ここに
お前の姿で横たわる
この美しいひとつの現実

5

今解体するいかだの昼がやってくる

少しの骨が

夜の川に漂うのを

星明かりがいつも
の水に浮かぶのを

川が波のように無の方に傾くのを
思う